聖冏上人の淨土宗學考

千賀眞順

目次

(一) 序說
(二) 信仰時代に於ける元祖教學とその傳承
(三) 理論時代に於ける冏師の宗學
(1) 時代概觀
(イ) 諸宗特に禪宗の狀勢
(ロ) 諸宗特に禪家の淨土批判
(2) 冏師の宗學
(3) 冏師の宗乘
(四) 結論

（一）序說

惟ふに現代宗門教學の動向を見るに、專ら教權傳承の釋義通りに文相そのまゝに信奉せんとする所謂傳統的立場に立つ風潮と、須らく現代に立て國策にこれ副應せしめるべく努力する研究的立場の二傾向が見らるる。この兩者は相努め相扶けてこそ眞に元祖教學に隨順する宗學研究の途があると思ふ。この兩者は表裏をなしつゝ一丸として打出さるゝ所が元祖精神の開顯であり、宗學徒の深く反省すべきものなりと考へられる。偶々本年は一宗中興の祖聖冏上人生誕滿六百年に相當し、更に聖紀輝く新發足の記念すべき年に相當するの因緣を顧みて宗學興隆、祖風顯彰、報恩謝德に資するは洵に宗徒の責務である、冏師有緣の地に於て奉讃の法要、事業等企圖されてゐる由、洵に同慶に堪へない。宗學研究の末學吾人も六百年前の冏師出世の意義及び爲宗鴻業の行績、特に冏師の淨土宗學に關する偉大なる學績燃ゆる如き深き信念の內證をいさゝか回顧して、冏師奉讃の微衷を捧げることとする。

宗史七百年を通じて二祖三代の定範昭々として明なり、卽ち元祖の後その傳承者何れも淨教弘通に大に努力されしも、對外的には教勢振ふも一宗獨立の整備ならず、念佛傳承の實蹟見るべきものがあるが、併し舊勢力の天台眞言、特に擡頭して一途に上下の尊信を博せる新興禪門に對しては往々對抗し得ず、こゝに冏師出世して隨他扶宗の見地より、內宗學の理論組織、制度の確立さては古典文化の發揚に盡瘁されて、名實共に堂々と宗門獨立の眞面目を發揮された。本稿にはその中冏師の宗學論に關して、既に多くの先輩の論作を見るが、今日の時局に對應して冏師の宗學宗乘の實義を眺め以て現代宗門教家として示唆に富み教訓さるゝ所あるを反省し自分の宗學研究に備へんとするもので

ある。

（二）信仰時代に於ける元祖教學とその傳承

元祖法然上人は善導大師の釋義を色讀すること實に前後八回、遂に末代の凡夫も阿彌陀佛の名號を稱すれば、必ず往生淨土の目的を達すべしとの深き確信に依て、承安五年（一八三五）淨土の立教開宗をされた。卽ち元祖の宗教は旣成宗教の形式、觀念、非人間的體系より脫して理論の根柢を「一心專念彌陀名號、行住坐臥不問時節久近、念々不捨者是名正定業順彼佛願故。」（散善義）に置て淨土宗を組織された、故に元祖の口稱專修念佛は罪惡の凡夫を標準として時と處と境遇との限定なく誰でも行ひ得る、洵に穩健なるものたることは今更言ふまでない。一枚起請文に一紙小消息等にでよく示さるる如く、「たゞ念佛申すもの往生はするとぞ源空は知りたる。」「常に念佛申すを最上の機とす。」「念佛申すにはまたく別の樣なし、たゞ申せば極樂へ生まると知て、心をいたして申せばまいるなり。」とあり、「たとひ餘事をいとなむとも、念佛を申しこれをするとのおもひをなせ、餘事をしつゝ念佛すとおもうべからず。」（勅傳二一）とて生活卽ち念佛たるの意義を說かれてある。故に念佛問答集に「聖にて申されずば、妻をもうけて申すべし、妻をもうけて申されずば聖にて申すべし、住所にて申されずば流行して申すべし、流行して申されずば家に居て申すべし、自力の衣食にて申されずば他人に助けられて申すべし、他人に助けられて申されずば自力の衣食にて申すべし、一人して申されずば同朋とともに申すべし、共行して申されずば一人籠居して申すべし。」（法全546）とて專修念佛の論理を敎示されてゐる。かくて四十三歲淨土開宗以後、京洛の貴賤男女は勿論、顯密の碩德にして專修念佛の敎說に共鳴

入信する者多く、文治二年（一八四六）の大原問答に依り益々共鳴者を出した。即ち顯眞座主初め同志十二人が元祖に歸依し大原に蓮社別所を造る。即ち「天台の顯眞、道友永辨と相會して出世の道を論じて當今吉水の空師に非ずんば與に道を語るの人なしとて大原に會し更に智海、證眞、湛斆、淨嚴、明遍、貞慶、印西、明定、運光、淨然等を魁首として道俗來りて耳を欹つ。」と言ひ、顯眞以下永辨、智海、靜嚴、明遍、貞慶、證眞、湛斆、重源等交々論難して說伏され、遂に「顯眞香爐を執り經行念佛し、諸宗の碩學三百餘輩異口同音に和して三日三夜別時行道し四來の道俗感歎して已まず。」（新本大原問答抄）とあり、當時に於ける佛教界最高權威たる顯眞の歸淨は甚大なる影響ありしものゝやうである。かの日蓮（一八八二―一九四二）も立正安國論、守護國家論等を著はして專修念佛を攻擊してゐるが、「叡山、東寺、園城、七寺等、始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞、道理かと見えければ、顯眞座主おちさせ給ひて法然が弟子と成る。その上たとひ法然が弟子とならぬ人々も阿彌陀佛に似るべくもなく口ずさみとし、心よせに思ひければ、日本國みな一同に法然房の弟子と見えたり。この五十年が間、一天四海一人もなく法然が弟子となる。」（撰時抄）と云ふてゐる。されば顯眞等の入淨は大きな意義を有すると云へる。

この大原問答が叡山に對する一の立宗宣言と見れば、後五年の東大寺に於ける三經講說は南都佛教に對する立教の宣言と言へる。即ち建久二年（一八五一）、重源將來の淨土五祖圖並に觀經變相を大佛殿に掲げて供養され時元祖は三經を講說された。この集會には三論法相の碩學と共に所謂南都の惡僧を前に、諸宗の教義を述べて淨土開宗の所由を講述され、（東大寺十問答）こゝに瀧山寺不斷念佛を始め、門弟は次第に增加し、他宗他門のものも多く歸依するに至つた。即ち大原問答直後、上西門院への御授戒、仙洞御所に於ける如法經修行（文治四年）宜秋門院への御授戒（建久二年）、この頃　後白

河法皇への御授戒並に御進講、先に歸依せし藤原兼實への授戒念佛（建久元年）を初め宮廷貴族への感化のみに止まらず、平重衡維盛の受敎、熊谷直實の歸淨、太胡太郎、津戸三郎等一騎當千の武豪の歸依到底擧ぐるに堪へない敎化の實蹟が擧つたやうである。（勅傳七以下）尙ほ他宗他門より轉向するもの續出しその二三を見れば重源（一一八五五）が歸淨し顯密諸宗敎團に念佛せること、「上人の勸化にしたがひて念佛を信仰のあまり、かの故山、上の醍醐に無常臨時の念佛をすゝめて、末代の恆規とし、その外七箇所に不斷念佛を興隆せられき、東大寺の念佛堂・高野山の新別所等これなり、そのつとめいまにたえずなんうけたまはる。」（勅傳四五）と言ひ園城寺長吏公胤（一八〇五—一八七六）は元祖の在世中選擇集に對して淨土決疑鈔三卷を作りて論難せるも、後元祖の高德博學に心服し、著作を燒棄てゝ受敎念佛す。（勅傳三九）又、建曆二年（一八七二）栂尾明慧は摧邪輪三卷を作りて攻擊して後悔し、（勅傳四〇）靜遍（一一八八四）は元祖の專修念佛を攻擊せんとするも選擇集を讀み大いに悟る所あり、慚愧して續選擇を作り或は宮中に淨土宗旨を御談義申上げたと言はる。（勅傳四〇）又天台毘婆門堂明遍（一八二七—一九〇二）も元祖を攻擊せんとして却て前非を悔ひ、述懷抄を作りて讃仰し入淨す。（勅傳四一）又叡山並榎の定照の彈選擇反駁より、山門の激怒を買ひ遂に嘉祿の大法難となる、（勅傳四二）併し既成敎團の壓迫が熾烈なれば却て專修念佛の流行する時態を生み、滅後愈々興隆して都鄙に普く行はれるに至つた。この事は正嘉元年愚勸住心の撰した私聚百因緣集に「元祖門徒數千萬。」と言ひ、或は日蓮の撰時抄に「日本國一同に法然房の弟子と見えたり。」云ふ消息にて、內外種々の妨難壓迫等はあつたが、開宗以後如何に盛んであつたかを物語るものと言へる。

元祖門下の傳承に就ては信空以下十數人（勅傳四三以下）とし、百八十餘人（七ケ條起請文）とし、他の諸記錄を綜合すると實に數百人の多きに達し門下榮え元祖の偉大なる人格宗敎を顯揚された。所が元祖の簡明な主張に係はらず。「この頃田舍にも

都にも（中略）故法然上人御坊の御弟子として一人も御坊の仰せ候ひし樣に念佛によく〳〵心いれて申せば三心はその中に、自然に備はりて往生するぞと云ふ人は一人もなし。」（名義集）とあり、授手印（淨全十11）にもこの消息を物語つて當時の安心義等三義を擧げ、或は一念義以下十五流（三國佛祖傳集）、幸西以下五流（源流章）等を擧げてゐる。中に就て幸西は破門された故四流說（金澤文庫本玄義聽聞抄）が傳承され、これに後世の教團狀勢より眞宗を加へて聖光、隆寬、長西、證空、親鸞五流說が門下の分流として認められてゐる。これ等の諸流の主張は本願念佛を稱名とし、諸行とし、或は信心とし起行とし、一念とし多念とするとの主張にて淨土、彌陀、往生等の淨土宗義の根本には異存なく肯定されてゐる。從つて元祖の教學の偉大性包抱性多樣性に基て起つたものであるが內部的のものとして門下各自の教養の相異、支那祖師の依憑の相異等、外部的のものとして當時の時代思潮の要求並にそれへの妥協調和、或は地理的環境に基因するなど、內外種々の事情に依て分流し、淨土門の教勢に分裂があつて多少弱められた觀があるが依然として念佛興隆には相當著目すべきものが見られる。何としても念佛正統は口稱主義の鎭西流たるは動かない。從つて諸宗の批判は元祖の直系たる鎭西流を中心として批判されたものと言へる。

第二祖辨長上人（一八二二—一八九八）は叡山にて寶地房證眞（勅傳一）に師事し台學の祕奧を究め、建久八年（一八五七）淨土門に歸依し淨土宗要を極め、「我が大師釋尊は唯だ法然上人なり。」と崇信し元久元年（一八六四）歸國して念佛を弘め道俗歸する者二千に及び、寺院を造建すること數寺に及ぶと言ひ。（聖光上人傳）三祖記主良忠上人（一八五九—一九四七）は貞永元年（一八九二）石州多陀寺に不斷念佛を初め、後諸國を歷遊して弘教と述作につとめ、鎌倉に蓮華寺（光明寺）を創め、或は宮中に宗要を說く。源流章に「初め鎭西に住し學業獨步、中比下總國に遊住、大いに淨業を弘め多く法匠を生む、後花洛に上り宗旨を弘

通す。」とあり、八十餘年の弘業四十餘の造寺ありと傳ふ。門下には良曉（白旗）、性心（藤田）、尊觀（名越）、道光（三條）、禮阿（一條）、慈心（木幡）は記主門下の六派として著明なり。六派は時に盛衰ありしも概して榮えず、併し鎌倉末期より天台眞言は漸く餘勢を保つ有樣で物の數でなかつた。こゝに新興の禪と共に淨土宗は教界に於ける二大勢力であつた。特に禪は貴族武家の尊信を得て京都鎌倉に五山十刹を構へ名僧碩學輩出し黃金時代を現出し、此に對し念佛道場の寺院の構え乏しくて教勢的に盛んにして未だ獨立宗派の體制を整備せざりし淨土宗に對抗し、之を反駁せるは時勢の然らしむる當然のことかも知れない。且つ淨土宗は三祖以後分派等にて榮えしも一時衰微の觀を呈したれば、禪の壓迫甚だしくこの時に白旗派より聖冏上人出でらる。

（二）理論時代に於ける冏師の宗學

(1) 時代概觀

（イ）諸宗、特に禪宗の狀勢

臨濟宗祖榮西（一八〇一—一八七五）は入宋して奧義を極め歸朝して聖福寺（筑前）、壽福寺（鎌倉）建仁寺（京都）等を開創し、門下に行勇（淨好寺）、榮朝（長樂寺）等あり。榮朝の門下に辨圓（一八七二—一九四〇）あり、東福寺を開き 龜山上皇に大戒を授け奉り九條道家の歸向を受く。又來朝僧道隆（一八七三—一九三八）建長寺等を開き北條時賴の歸依を得、祖元（一八八六—一九四六）あり、時宗の歸依を得て圓覺寺を創む。又道隆の門の紹明（一八九五—一九六八）は京都萬壽寺を創め 伏見上皇 後宇多上皇の御信任を辱ふし貞時に歸依され、辨圓の門の顯曰（一九〇一—一九七六）は萬壽寺等に住し門下に疎石を出す。その他冏師出世直

前の臨濟僧として著明なる者、一寧（一九〇七—一九七七）あり後醍醐天皇の御歸依を蒙る妙紹（一九四一—一九九六）ありて大德寺を開創す、東福寺の師練（一九四七—二〇〇六）後伏見天皇の御歸依を蒙る等史上に幾多の人材輩出し、大に禪風の興隆に努力しその敎化上下に風靡し、京都鎌倉を中心として悔るべからざるものがある。此等の名德何れも語錄等に作り禪獨特の敎風を掲げたが、初期の禪風には當時相當淨土念佛の盛んなるに對して又その影響が見られないでもない。卽ち沙石集に、「故建仁寺の本願僧正、戒律を學し、威儀を守り、天台、眞言、禪門、いづれも學し行じ給ひ念佛をも人に勸められけり。」とあり、或は「他門の人禪宗念佛について諸の謗難を致す。」（田家大綱）臨濟禪の初期には禪者に台密戒と共に念佛の影響さへ見られる、禪の兼修的協調的傾向を發見することが出來る。翻て曹洞禪を慨觀するに宗祖道元（一八九六〇—一三）は永平寺を開き正法眼藏等を著はし、その門懷奘（一八五八—一九四〇）は傳承上逸材として注目され、義介、寂圓、義演、義準等を出し、義介の門に義尹、紹瑾等あり。紹瑾（一九二八—一九八五）は總持寺を開きその門葉繁昌し敎線頓に擴大した。かゝる禪門の勃興期に偶然際會して出世せるものが冏師である。冏師當時の南北朝初期に於ては、臨濟曹洞兩宗とも碩學高德輩出す、就中臨濟の夢窓疎石、曹洞の明峰、峨山三師の接化は洵に日本禪宗史上前代未聞の盛觀を呈し、疎石は京都に於て臨濟禪を明峰峨山兩師は北國關東を中心として曹洞禪を弘布せしめてゐる。その他臨濟に惠玄・元光・德見・義亨・志玄・周信・妙葩・中津・一休等が秀れ、曹洞禪には知洪・至簡・大智・了光・旨淵・道珍・宗令・圓照・寂靈・良秀等が知られてゐる。中に就て直接冏師宗學の道因をなせし疎石（一九三六—二〇一一）の如きは皇室の殊遇を幾度か賜はり、或は紫衣、國師號、御授戒等殆んど他に例のない程の御信任であつた、（高僧傳二八）成程疎石は傑出せる禪僧なれば、門下にも多くの高僧輩出し、就中無極・碧澤・義堂・春屋・默翁・鐵舟・不遷・大法・絕海・無求等の俊

哲を出す。卽ち天龍寺無極は佛慈國師、春屋（一九七一—二〇四八）は出藍の譽を擅にして智覺普明國師號を、絕海（一九九六—二〇六五）は佛智廣照國師號を賜はる等何れも皇室の御歸依を受け且つ足利氏の外護を蒙るなど禪風興隆に黃金時代を現出したものと言へる。その他僧傳に特筆さるゝ者空谷・瑞溪・宗弼・無等・天祥・義冲等枚擧に遑なき程である。（高僧傳二八—三〇）曹洞禪に於ても岡師出世當時に於て明峨兩師の後明峰の十二派、峨山の二十五哲を輩出し、前者は關東・奧羽・北陸・中部地方に、後者は奧羽より關東に涉り、數代を經ずして全國に寺院造立され、史上に著はるゝ大源・梅山・了堂・了菴・石屋・普濟・天眞・月泉・源翁・大徹・實峰等の俊哲現はれ臨濟禪と共にその極盛時代を展開し、その上來朝僧歸朝僧として明極・淸拙・竺僊・妙胤・永璵・無文・周及・大拙・以亨等（高僧傳二八—三六）ありて禪門興隆に拍車をかけ禪は全く旣成宗派に打て變る敎線を張るに至つた。我が三祖良忠上人が永仁元年（一九五三）七月　伏見天皇より記主禪師號を（高僧傳一五）岡師が　稱光天皇より禪師號を賜る事など全く當時盛んなりし禪の影響に依るものでこのことを見ても如何程禪が盛んなりしかは想像に難くないのである。

（ロ）諸宗特に禪家の淨土批判

岡師時代は先に述べし如く天台、眞言と共に特に禪の極盛であつて、禪家の諸碩學の各語錄、著述に禪の敎理並に傳承を明して淨土宗門の傳承並に理論を要請し、その敎理並に傳承の貧弱さを指摘して無相空寂の理を發揚して堂々と敎界に君臨し淨土念佛門を壓迫すること甚しきものがある。併し禪門開創以來直接に淨土を妨難せる祖典は乏しく、彼の日蓮の立安正國論、守護國家論等に見る激越なる筆法は殆んど見られないと言ふてよい。恐らく禪を以て唯眞實の佛法とし、理論的に淨土宗義を無視し之を顧みられざるものゝやうである。それ故に榮西の興禪護國論、出家

大綱、中興願文等、道隆の大覺禪師語錄、辨圓の聖一國師語錄、祖元の佛光國師語錄、紹明の圓通大應國師語錄、顯日の佛國國師語錄、一寧の一山國師語錄、妙超の大燈國師語錄、師錬の佛語心論、疎石の夢窓國師語錄等の臨濟禪に關するもの、更に道元の正法眼藏、學道用心集、語錄等、懷奘・紹瑾・素哲・紹磧・寂靈等の諸語錄等の曹洞禪に關する禪書に就て見るに直接淨土妨難の語を發見するに苦しむ程である。即ち大覺語錄に「地獄天宮皆淨土たり、有性無性齊しく佛道を成ず。」(佛全九五)と言ひ、佛光語錄に「彌陀、頭頭垂示、處々接引、衆生界中、幾時得盡、八德池深花正紅、金沙葉底吹香風。」(佛全九五)とある底のもので結局「一切衆生は無始本有の如來なり」(寶慶記)と言ひ、「唯急ぎて心性の常住なる旨を了知すべしいたづらに閑坐して一生をすぐさん、何のまつところかあらん。」(辨道話)と言ひ、「まことの得道のためには、たゞ坐禪工夫、佛祖の相傳なり。」(隨聞記)とあり餘門に言はざる即心即佛、即坐成佛の旨の禪本來の宗旨を强調せる祖風を傳承祖述してゐるものと見てよい。所が天龍寺疎石は「淨土宗、小乘なり。」(夢中問答)と批謗す、本書は疎石が修道の必要を說き八十餘の問答より成る通俗書にして、その述作は元應元年(一九七九)より觀應二年(二〇一一)の間に成りしもの故冏師出世前後のものと考へらるゝ、この書に對しては先に智演(一九四三—二〇三二)ありて夢中松風論十卷を撰して反駁す、疎石は更に谷響集二卷を著はして誤解と辯駁すれば智演更に警覺論及び師子伏象論六卷を著はして應酬す。冏師更に之を繼いで冏師宗學に之を酷駁されてゐる。又東福寺師錬(一九三八—二〇〇六)は元亨釋書に淨土の無傳統を批判して寓宗と反駁さる。本書は元亨二年(一九八一)に述作されてゐるから、又冏師出世十九年前のもの、同書第二十七卷の諸宗志に、三論、唯識、律、華嚴、天台、密、禪の七宗を宗派と認めてその概要を述ぶるに對して、淨土宗は成實俱舍と共に寓宗と極評してゐる、即ち同書第二十七に「淨土一宗或大或小依二修者一而然、無二祖宗之

定系ニ故也、乃至本朝空也師倡レ之、猶ニ導之於レ唐、源信源空繼而助レ之、雖ニ廣行ニ四部ニ而無ニ系統ニ故今爲ニ寓宗ニ。」（佛全一〇一470）とて淨土無傳統を批判して俱舍成實二宗同等視し、且つ禪宗間に極力かゝる批難をなせし樣である、問師としては之の謗難を傍觀するに堪へず、愛宗の一念より敢然として反駁された。卽ち頌義第二十九卷に「幸我高祖源空上人大和尙於ニ夢定中ニ奉ニ謁半金色大師ニ宗敎並承心行俱決、雖ニ大師滅後四百五十三年末弟ニ親寫瓶相承、斯乃谷不レ惜レ響、古今恆然者乎。」云云（淨全十二331）と言ふて闡々として淨土傳統の祖承恆然と絕へざること、禪の嫡々相々とその趣を異にする所なしとの深き信念を擧示されてゐる。その筆法鋭く對者をして感歎肯首せしめずに置かない、之を更に强調する爲め淨土傳戒論を著はして宗戒兩脈の傳承を聲明されてゐる。今傳承論に關しては之を割愛するが、問師が天台・眞言・禪に對し特に禪門のかゝる謗難に對して、嘗て深く體得せる禪の奧義を知悉せる上に於て、敢然自信を以て愛宗護法の一念より淨土宗乘の開顯に努められしか、問師の宗學考に就て之を要述することゝする。

(2) 問師の宗學

問師（二〇〇一―二〇八〇）は八歲入門して宗義は了實・蓮勝兩師（末山傳）、定慧師（本山傳）より定戒兩脈を傳承さる。諸宗の敎學に就ては常陸法幢院宥尊に密敎、宇都宮東勝寺眞源に天台、但馬大明寺月庵宗光及び茂古林派の月察天命等に禪、澤田の頗阿に和歌、權禰宜治部小輔某に神道等、各奧義を傳承し深く悟る所あり、或は各地を巡化して念佛を弘宣し、學徒を敎養して人材を育成し、或は頌義等三十有餘部百數十卷の著述をなして淨土至極の旨を明し、三河大恩寺等諸寺を起立して敎線擴張念佛の道場となし、五重傳法の樣式を制定して宗制の基礎を築き、書紀研究和歌等の日本文化を宣揚する等、八十年の攝化と相俟て洵に一宗中興の鴻業を成就されてゐる。（聖問上人行業記等）、破邪顯正義に「余

昔下二石州一有レ之。」（淨全十二827）とありて、若年の頃關西中國地方に遊學せられ、特に數年間京都方面に遊學された、この時正に禪の黃金時代で、康安年中（一三〇二八—一三〇三四）五山十刹の住院年紀が定められ、南禪、天龍等の諸大禪寺が相次で造建せられた故、岡師は直接禪門の主張と教勢を見聞せられこゝに痛感され京都よりの歸途鎌倉建長寺にて禪林歌一篇を作り、頌義本末三十一卷（四五歳作）の大著を公にし、元祖の選擇集、二祖の西宗要、三祖の決疑鈔の意を承け、元祖と歴史的事情を異にする時局に卽して更に自身の學見を加へられて淨土一宗の大要を盡された。岡師三十七歳作の鹿島問答に早く宗學の特色が顯はれてゐる程である。頌義述作に依りこゝに岡師以後淨土宗學史上一轉期を劃するに至つたのである。

教判論　岡師宗學の教判は三師教相中、導師の二藏二教の判に依らる。卽ち頌義第一に元祖の建曆法語中の「若し光明大師の釋義に依て淨土宗を立つる人は、二藏と二教とを以て一代の諸の聖教を攝すべきなり。」（淨全十二、16）とて導師の觀經疏玄義分に明す二藏二教判である。二藏とは聲聞藏、菩薩藏の二にして小乘と大乘との分判である、二教とは頓教と漸教にして、これ天台眞言特に禪に對して扶宗上佛願一乘の淨土頓教を頓中頓と判じて勝れたるを示され元祖は一代佛教を人間性に立て聖淨二門に分別し、機教相應の淨土宗を以て究竟大乘諸宗超過の教なりとして選擇集に顯明なり。然るに岡師特に麒麟聖財論の教判に依り一代佛教を五教に分別し、小乘初分後分性頓相頓とす、小乘は俱舍成實律、初分教は法相、後分教は三論にして何れも隔歴有相の淺教とし、性相二頓教は圓融無碍の深教なり。中に就て性頓は華天密禪の教義にし唯理唯性を說く、相頓は事理縱橫の諸宗統攝最極法門にして淨土宗の說く究竟の圓教なりとす。淨土相頓義を明すに、內因、外緣、往生品位の三門を立て、內因に、安心起行作業の別ありとし、安心に

總安心別安心の別を立て、厭欣心及び菩提心を總安心、至誠心深心回向發願心の三心を別安心とし、起行に正雜二行を立て、世戒行の三福を以て雜行とし、五正行、五念門、一行三昧を正行とし四修を作業とす。次に外緣は彌陀の本願力、これに總願別願を立て、總願は四弘誓と三念力、別願に攝法身・攝淨土・攝衆生の三種ありとし、見佛護念等の五種增上緣を明す。往生品位に三輩九品橫竪分別し、次に淨土實義無輩品を明かされてゐる。

破邪顯正義に「近代禪門の名匠の中に西方の業を難じて曰く、念佛のみ修して萬善萬行を難行道と名て徒事と云ふこそ僻事なれ。」(全十二820)と言ひ更に「近代禪門名匠中に念佛往生の宗義を評するに頗る小乘に判屬するに似たり、所謂彼の義に云く、穢土の外に淨土を欣び、凡夫の外に佛を求むるが故に大乘と云ふべきに非ず。」(十二830)との夢窓の反駁に對して七理を擧げて、(1)彼の人釋迦の外に佛あるを知らず、(2)大乘(禪)と至極大乘(淨土)に就て明し、(3)彼の宗經も三界の外に淨土を立て往生の宗旨を明す、(4)禪の淨穢不二凡聖一如の義を以て至極大乘とするは遮情空觀とし、(5)禪の淨穢不二凡聖一空と云ふは別傳不共の敎なり、(6)淨土の敎門の至極大乘に非ずと言ふは宗の大意を祖師の他力實體を知らず、(7)佛の密意よりは生卽無生、無生の生を往生と言ふ、不來にして來なるを來迎と言ふ。」(十二83)とて聖道の頓と淨土の頓の相異する所由を明し淨土敎の空理を巧妙なる釋義に依て開顯されてゐる。又更に頌義第十卷には隨分禪に對して酷評されてゐる、卽ち同文に

「靈智智眞見見自性寂任運照、超然離二言說一卓爾無二依倚一、唯理唯性頓敎所レ談、更非レ可レ諍、離レ然還レ機修行之時、智眼明理性通志堅固、具レ二闕レ一尙是不レ是、況具レ一闕レ二何況三種無分、今時道俗實智眼盲非二智眼明一、諸法理闇非二理性通一、徹底行惓非二志堅固一、設雖二志堅固一若非二理性通一者非二禪門行人一、設雖二理性通一若非二智眼明一

者亦非二作家先生一、設雖二智眼明一若非二志堅固一者亦非二禪門正徹一、設雖二志性堅通一若非二智眼明一者亦非二禪門學者一、設雖二性智通明一若非二志堅固一者亦非二禪門根機一、其言二志堅相一者辨二取今生明生一劫百劫千劫萬劫一、誓下設鐵輪轉二頂上一定慧圓明終不レ失、是尚卽闕二智眼明理性非二禪正機一、唯是憑下於二袈裟下一不レ失二人身一再出頭來而成中一聞千悟上此則微微結緣也、猶不レ足レ言二難行道一乎、其上汝宗調機一乘故無二解會一則勞而無レ功、故古人云承當非レ無、唯是無二人知一云々、凡厥入二三種正機一具二五種正信一於二億々中一未レ有二一人一何云レ不二難行一。(淨全十二122)

とて極力鋭鋒を以て禪を反駁さる、當時禪が盛んにして、直指人心見性成佛の宗風が深く世道に徹してゐたから、冏師は性相二頓を分別し、今時末法下機鈍根のものはその機に非ず、卽相不退事理縱横、不斷煩惱得涅槃の極致たる淨土相頓教の教義を開顯されてゐる、如何に當時禪が盛んであつたかを想察し得る。

惟ふに冏師宗學の判教論は獨自の學殖と深き信念に基く新宗學の體系と言ひ得るが、果して然らば冏師の單なる獨創にかゝるものと言ふべきか、顧みて元祖より冏師に至る二百餘年間に淨土宗學は不斷の展開をしつゝ開顯されたと言ふべきである。成程冏師は宛も獨創的新教判を考案されたとも見られ又斯く論ずる學者なしとせないが、早く望月博士も「淨土教の研究」(一〇八)中に冏師の學風の由漸に於て論述されてゐる如く、決して冏師教判の由漸を看過してはならぬ。元祖以後に就て見るも冏師の「淨土名目圖」及び頌義第一卷(淨全十二16)には元祖に建暦法語なるものあり、この法語に二藏二教の判を以て一代を攝すべしとあり、又大經釋に「天台眞言皆名二頓教一然彼斷惑證理故猶是漸教也、明二未斷惑凡夫直出二過三界長夜一者偏是教故以二此教一爲二頓中之頓一也。」(法全135)と言へるを以て元祖宗學に則して之を開顯されたと言はねばならない、更に大原問答の隨所に說かれる教說、證空の觀經疏他筆鈔(佛全五六270)にも

屢々二藏二教の判教が引用されてゐるのを見ても首肯される所である。

淨土論　頌義第十一に淨土相頓義を標して「相頓卽是易行道、往生無生淨土門、他力祕術佛意教、卽相不退頓中頓」（十二、115）と標して易行道の故に卽ち往生を得、若し往生すれば速に無生を證す、無生は卽ち淨土門にして他力の祕術、他力は佛意の教なる故に卽相不退、頓中頓の相頓也（同126）とし、更に教相第四重にも論註を引用して「判二速得成就阿耨菩提一加レ之虛無之身無極之體說皆令得佛泥洹之道文最是可二信受一。」（淨全十二、746）と言ひ、同じく「無生者卽是涅槃也涅槃者卽是不生不滅也。」（全十、767）と言ひ、念佛卽是涅槃門。」（同、768）とて淨土の頓中頓を顯はし、頌義流通分に「我依大師二藏藏、略說二事理俱頓頓一、願使二後昆未聞聞一、見生直得二無生生一。」（十二、336）と結論して卽相不退の教門は佛意不思議の宗教、佛願所建の出離なるが故に事中に理を含み、見生卽ち無生なり、無生の人は無生の解を以て而も往生を得る、見生の人は見生の心を以て而も無生を得る、是れ生卽無生の義なりとあり、又相とは指方立相捨此往彼なり、卽とは此の指方に卽して而も無方也、この立相に卽して無相なり、往生の見を改めずして當體卽ち無生なりと言ふべきなりと主張されてゐる。

故に淨土に就て問師は略名目圖見聞上に「淨土爲二是三界內一、亦爲二三界外一、答三界是業煩惱所感也故云二不淨一、淨土是淨眞如所流也故云二淸淨一、知三界外事、乃至若約レ處者淨穢共三界內也。」（淨全十二、680）とて場所は同一所なる故三界內と云ふべく、若し體について云へば兩界は全く反したもの故淨土は三界の外と云ふべきである。これ天親の往生論に「三界の道に勝過す。」と讃歎されしに基いて言はれてゐる。

往生論　問師は頌義第十一卷に「若し實義に約して無生なり、見生の當體無生なり、無生にして生ず卽ち是れ往生

なり。」(淨全十二、127)とあり、教相第七重に「以三欣求心計一、直得三往生一、往生卽成佛也。」(同上、750)とて扶宗の立場より往生の本義を說いて禪に對された。これ鸞師が論註に諸法は因緣生の故に是れ不生なり、所有なきこと虛空の如しと云ひ、又導師の法事讚下に「極樂は無爲にして是れ精なり(乃至)不退は卽ち無生なり。」(淨全四、20)とあるに基て立說されてゐる。從て淨土九品を說ては頌義第三十卷に「九品は是れ應化の道、淨土の實義輩品なし、同一無差にして薩婆若なり。」(十二、340)と論じて淨土實義無輩品を斷じ、初生に約して九品の別あり、終りについて輩品なしと云ふべきものと釋されてゐる。

神道論　淨土宗に於ける神道觀は正しく、冏師の破邪顯正義(一卷)、天地麗氣記私鈔(十四卷)及び同拾遺鈔(一卷)日本書紀私鈔(三卷)等に見られる。これは淨土門に於ても當時民族意識に基て神祇をその敎理の上に組織されたこととして注目される。この影響を受け神道論に關して等閑に附し得ないものがある。神道論に關しては他に執筆されてゐるから割愛するも、麗氣記私鈔、書紀私鈔には神佛同體說を述べてある。淨土宗的神道觀として興味深きは顯正義である。念佛信者として如何に敬神すべきかを例話せるが、今日の時局下洵に宗徒として示唆に富み訓へられる所がある、且つ淨土宗徒として如何に太子を尊崇すべきかに就ても穩當なる見解を下されてゐる。思ふに無住も「淨土門の人神明を輕んじ罪を蒙る事。」(沙石集第一)とて、當時淨土門のみならず、天台眞言禪門に邪義を立てし如何はしき僧俗のあつたことを指摘してゐる。

故に冏師も鹿島問答に「近年稱三念佛者一人中、穴賢誠三神明參詣事一經論中有三其理一乎。」(十二、812)と問ふに、導師の觀念法門、禮讚文等を引用して「神明の本意未だ出離生死をも知り給はず(中略)縱し今和光同塵の悲願の有難きこと

を感じて參詣することもあり（中略）何ん時も心に任せて參詣するなり。」（同上）とあり、更に天照大神を初め諸の神明に對して念佛者として神を崇敬せぬ者はないとの內意を窺ふに足り、時局下神佛論爭のある時、早く民族意識に燃えて敬神のことを示されてゐる。又破邪顯正義に「近比念佛者の中に聖德太子を以て觀音勢至よりも最も正となして、安置し奉る輩小々有りその理如何ん。」（十二、821）との問ひをなす程、和國の敎主太子の像を祀り或は本尊となす風が流行したものゝ如く、淨土宗義より太子像を尊祀することに關して、祖師に指南なくいさゝか迷ふ次第である。所が岡師は鹿島問答、麗氣記抄等にそれに就て最も穩健な態度で宗徒としての途を指示されてゐる、卽ち、問答に

「凡ソ夫レ彼ノ太子ト申シ奉ルハ、是レ忝モ、東宮ニ立チ給フト雖モ恣ニ佛法ヲ弘ン爲ニ、王位ニ卽キ給フコトナシ、自ラ法華維摩勝鬘等ノ三經ヲ講ジ、並ニ義疏ヲ製シ給ヘリ、直ニ守屋ガ邪見ヲ降伏シ、如來ノ正法ヲ守護シ給フ、總ジテ是レ造寺・起塔・安佛・度僧・轉經・念佛・講經・修禪、併ナガラ是レ太子外護ノ恩力ナリ。抑モ又佛法最初ノ檀越ナリ。若シ爾バ報恩謝德ノ爲ニ彌陀觀音等ヲ安置シ奉リ、傍ニ之ヲ勸請シテ、隨分ノ供養隨時ノ恭敬ハ最モ殊勝ナルベシ。」（十二、824）とて淨土宗徒として太子崇敬の態度を瞭にされてゐる。岡師の神道崇敬、太子鑽仰以て日本精神の發揮に努力された功も決して忘れられない。

要之に岡師の宗學は既に元祖宗乘の展開に元祖以後由漸しつゝありし開顯が、理論時代の急激なる要請に相應して樹立されたものと言はねばならぬ。卽ち最も簡明な穩健な扶敎相應の單信單稱の主張がこゝに一轉回して不斷煩惱得涅槃、此土入聖の卽身成佛論と殆んど同じ揆に立ち、又指方立相の元祖の主張は、淨土無輩品・往生成佛の禪的表現と成り、こゝ所謂二祖三代の敎判に對照して宛も相容れぬ距離を持つかの如く觀られるに至つた。併し岡師宗學こそ

大玄師も讃仰されし如く（頌義探玄抄）浄土宗の元祖としてよりも、法然の法然たるより深き意義を顯彰されたものとして洵に感佩に堪へぬものがある。されば岡師の宗乘は如何、岡師の元祖精神に生きられたかは吾人の注目すべき所でこゝに元祖の中興傳承者としてその鴻業に對し感歎惜く能はないものがあると思ふ。

(3) 岡師の宗乘

岡師の宗學は元祖、二祖の專修念佛義を組織的に開顯力說せしものである。故にその宗乘に就ては敎相十八通第一重に元祖相傳の西宗要の文を擧げ、

「此相傳は釋迦如來は但四字を以て淨土宗を說き給ふ。謂く二者深心の文なり、光明大師は十一字を以て淨土宗を釋成し給ふ、謂く言深心者卽是深信之心也の釋なり。——この如來の四字、大師の十一字、但一字に結歸す、所謂順彼佛願故の故の字これなり。之は上人の所得なり。然則、大師は經の二者深心の四字に依て淨土一宗を釋成し、上人は釋の故の一字を得て念佛の一行を選擇す、三國相傳の宗義の源、二者深心の一句に依る、豈啻、大師上人のみならんや。玄忠西河も亦同じく三信三不信を立て、前後の二心を釋せざるは寧ろ要中の要に依るなり。謂ふ所の三信三不は天親の我一心を釋す、論の十六章の初に亦起觀生信門を立て、五會門の行を開出す、故に知らんぬ。流支玄忠西河光明吉水但二者深心の四字に依て淨土宗を立つるなり。」（淨全十二、738）

と云ふ。これ淨土傳統列祖に全く隨順されし岡師の內證と言へる。破邪顯正義に「今愚官所解以二上人御言一爲レ本。」（十二、819）とある如く、飽くまで傳統列祖、特に元祖所立の根本精神に全分爲本され、全く元祖宗乘の純正傳承者を以て任じてゐられる。故に信は單直大信、行は散心口稱念佛、偏依善導一師、選擇本願念佛義等全く元祖に同じであ

る。

安心論　三心義に於て、「願往生の心飾らざるは至誠心なり、願往生の時自身に於ても佛力に於ても疑はざるは深心なり、心と行を運んで往生を願ふ當體は廻向心也、是を一心卽三心と言ふ。」（十二、159）と信受され、十八通裏書（同上、777）に要約して

總依一代別三經　總依三經別十六
總依十六別一句　總依一句別一字
斯依一字立眞宗　具一字者深信心
諸佛已證生本覺

と言ひ、又同樣に又教相第二重の終りに諸宗を十宗に約して解信因果の四句を作り、淨土宗は解信の大信の宗教にして、最高の地位を占むる所以を明されてゐる。卽ち

解解　因分因分宗教—俱舍、成實、戒律
解信　因分果分宗教—法相、三論
信解　果分因分宗教—華、天、眞、禪
信信　果分果分宗教—淨土宗—單信
　　大信—信宗教（果分不可說宗）

—解宗教（因分可說宗）

と表示して所云「一句者深心四字也」（十八通卷頭）は是れ甚深の口傳也として特に宗義上安心の重なる所由を最初に傳承し信受されてゐる。

起行論　正行に就て「五正行中亦有レ二、合則助正開爲五、助業有レ四亦爲レ五、讀誦正行三部經。」（十二、175）と、「觀察正行に依正あり、依に通別あり。」（十二、189）とし、正業は本願正中の正なり（十二、212）として導師散善義の一心專念の文に隨順され正定佛願業を規定さる、導佛の三緣增上緣を强調し「一レ心一レ處一二歸依一、捨二諸亂想一念二一佛一、不レ觀二相貌一專稱レ名。」（十二、240）として本願生因の妙行、萬德所歸の要法として詳述さる。又一枚起請之註に元祖の一枚起請文の「唯往生極樂」より「別の子細不候」までを撥迹入源門卽ち仰信分として「只爲二往生極樂一者、正しく是れ淨土正機也、此機は念佛申せば極樂に往生すと心得て、更に疑慮なき也。」（淨全九、4）として、選擇集の文卽ち「諸師は別して十念往生の願と云ふ、則ちその意周からず、然る所以は上一形を捨て、下一念を捨つるが故なり、善導は總じて念佛往生の願と云へるは其意卽ち周し、然る所以は上一形を取り下一念を取る故なり。」（選擇集）と申されるに信順して宗乘の純正を發揮されてゐる。

又岡師は生卽無生、見生無生等の見解を立てゝ之を實義と見るも、本註には之を言はず往生者捨此往彼蓮華化生の義となす、これ仰信分を解釋する爲であり、又三心四修決定して南無阿彌陀佛と云ふを問答して、「南無阿彌陀佛にして往生せんと思ふ內に籠ると云へば必ず機具と聞えたり。」（淨全九、4）とて念佛行者の修する口稱正行こそ本願正定之業と仰信專行されしことが瞭である。且つ導師の五種增上緣義、四種作業等をも傳承されてゐる。

偏依善導　同師宗乘の所立は偏依善導の元祖を祖述されて、多くの立義施釋に必ず導師の釋を依用されてゐる。例へば敎相十八通に三經正依の規定に就て散善義を引き、觀經爲宗に就て同書を引き（第一重）、仰信一乘に就て玄義、散善を引き、信の信、果分の果分に就て玄義、禮讃、般舟讃、散善等を引用してある（第二重）。又二重の裏書に「善

導の教に相應し、淨土の三部經に相應す。」（淨全十二、741）との元祖の御義を示して次に「只念佛往生ヲ仰ギ信ズ、釋迦ハ念佛シテ往生セヨト勸メ給フ、彌陀ハ念佛セヨ來迎セント仰セタリ、此ノ一事ヲ信ジテ餘ノ事ハ知ラズ、我等ハ法然上人ヲ信ジ奉リ、法然上人ハ善導ヲ信ジ奉リ、善導ハ釋迦彌陀ヲ信ジ奉リ給フ。」（淨全十二、742）とある。以上第一第二重のみに就て見るも、全く偏依善導の宗是を全分傳承されしが分る。第三重以下、並に他の諸書に見る所も全くこれに同じである。正しく元祖を祖述して偏依善導の立場を傳承仰信されてゐると言はねばならない。

要之に罔師の念佛義は教相第三重に「凡諸宗之習統萬行於一法、縮萬慮於一心、所以今我淨土宗一心一行外更無餘事也、其一心者信心也、其一行者南無阿彌陀佛也。」（淨全十二、742）と言ひ、授手印三十七個條口傳の第十二に「淨土宗とは二字に習ひ極むるなり、安心の一字（信）、起行の一字（故）なり、亦極めては一字（信）なり。」と口傳を設けて、淨土宗乘の肝心を指摘され信受傳承されてゐる、洵に宗乘の純正を端的に擧示された事、中興の祖として仰げば愈々偉哉と歎ずる次第である。

されば古來より罔師の十德として、本地高位、諸宗博通、淨家再興、說法辯才、神歌兩道、作文殊勝、多聞自覺、長闕睡眠、額上纖月、單信直行、とあるが、略々德行功績を簡明に傳へ、更に攝門は他師伏德、著述殊多、開寺數宇、宗徒範制、法問立規、傳法盡妙、得補德弟、誕生貴族、神天擁護、遺跡光輝の十德を附加してゐる。洵に宗門興隆の基礎を大成せるものと言はねばならない。

（四）結　論

元祖の人格並に教學に發する淨土宗史七百有餘年、その間に正に中興の祖として淨土宗學並に制度に劃期的貢獻されし冏師の功績は愈々鑽仰すべきものを惟ひ、その宗學に就て一考したに過ぎない。現在は冏師時代の諸宗に對する淨土宗の開顯に止まらず現代指導力としての宗學の開顯に努めねばならない時局に際會してゐる。故に冏師の新宗學を回顧し依て以て現代宗團と共に生きつゝある宗團信仰を明にし、以て淨土宗學の樹立に愈々吾人の責務を感ずるも他日を期して、今は冏師生誕六百年の記念に報恩の微衷として宗學考一般を捧げまつることにする。